

～織田信長サミット2009に向けて～



小牧山

戦国に馳せる

清須市文化財保護審議会委員

第7回 天下に躍り出る

加藤富久

桶狭間の戦で大金星

永禄3年（1560年）に桶狭間の戦が起こりました。

尾張統一戦の最中、鳴海城主山口父子が寝返り、近くの沓掛・大高城も今川方になっていました。織田信長は謀略を用いたり、鳴海城に丹下・善照寺・中島砦を、大高城に鷲津・丸根砦を築いて、對抗の姿勢を示します。こうした信秀以来の国境争いに決着をつけるべく、駿河の今川義元自身の出馬となったのです。それにしても、駿遠参2万5千人の今川軍に対し、尾張平定直後の信長の動員力は多くて3千人で絶対のピンチをむかえました。5月18日、義元は沓掛城に入り、その夜徳川家康に大高城兵糧入れを行わせ、次いで鷲津・丸根砦攻めを命じます。



桶狭間出陣の信長銅像（清洲公園）

清須城下は上へ下への大騒動となりましたが、城内の信長は一切を秘したまま、軍議もせず寝てしまいました。しかし翌19日未明、戦闘開始の報で起きた信長は、例の「人間50年」と敦盛の一節を舞うと、具足を付け、湯漬けをかきこみ、午前4時

頃、主従6騎で清須城を出撃、8時頃、熱田神宮に戦勝祈願しました。

ようやく集まった兵を整え前進するも、両砦の陥落を知り、善照寺砦に兵をまとめた、そのとき、「義元本隊5千人がおけはさま山で休憩中」との築田政綱の報を得ると、部下の制止もふり切り中島砦から東へ軍を進め、真正面から義元本隊を目指しました。そこへ、俄かの豪雨で今川軍は大混乱でした。

午後2時頃、雨があがるとともに信長は今川軍本陣を急襲し、信長の陣頭指揮と精鋭2千の活躍で、服部小平太・毛利新介が義元を討ち取りました。すべては部下をもめざむく決断と幸運の結果でした。

清須に凱旋した信長は、討ち取った今川方の3千余の首級を城外須賀口に築いた塚に甲い、義元の首級は孤軍鳴海城に籠る岡部元信に送り届けています。義元の佩刀左文字に戦勝を追刻、熱田神宮に信長塚、日置神社に松樹千本を寄進しています。

清須同盟と美濃攻め

天下に武名をとどろかせ、天下を意識しだした27歳の武將織田信長の進む先は、西、ただちに美濃攻めを開始しました。翌年、美濃の斎藤義龍が急死し、森部・十四条の戦では、後を継いだ龍興の軍を破り、

墨俣の地などを得ています。なお、木下藤吉郎（後の豊臣秀吉）がねと清須で所帯を持ったのは、この頃のことでした。

信長はこうした西方進出に専念する戦略として、今川から独立した三河の徳川家康と提携を深め、永禄5年（1562年）1月、清須に来た家康との間に清須（織徳）同盟を成立させました。これは翌年、信長の娘徳姫と家康の嫡男信康との婚約で再固めされ、本能寺の変まで20年間守り通された戦国時代には珍しい軍事同盟でした。

この頃、知多の佐治水軍も信長に服属し、鑄物師水野太郎左衛門の尾張専売権、瀬戸物の保護など、国内統治も成果が上がってきていました。

しかし、斎藤軍との美濃軽海や稲葉山の戦では連敗した上に、一族の犬山城主織田信清までが斎藤氏と通じたので、永禄6年（1563年）信長は美濃攻めに有利な小牧山に築城、8年

余在城した清須から居城を移すことになりました。



平成元年竣工の清洲城天守閣

問合せ先 文化振興課 ☎ 76 1189